



湯川さんの英語が一語、一語、区切るように、高い天井の会議場に流れる。各自が属する国の利権はなれ、人類の目として参加した科学者の目と耳が注がれる。人類が生かされるかどうかがかかった核兵器廃絶。その道を求めて二十八日、国立京都国際会館で、開催した「第二十五回バグウォッシュ・シンポジウム」。参加者三十八人と、規模こそ小さいが、会議にはスリと重たいものがたまたまついていた。

1975.8.27
朝日夕刊

小規模だが漂う重み バグウォッシュ会議

湯川さんも満足気に 終始笑み 病おし夫人と出席

「あいつだけは」と病をこし「言」に署名し、第一回会議(一九七五年)に出た湯川さん。この日は、主役である。午前九時十五分、ラッセル・アインシュタイン宣

授と車とで会場へ。開演中の無精ひげが長くのび、ツエエに車からおり立つ。会館が空を閉めて用意した車いすで控室へ。終始、おたやかな笑みを絶やさない。
あいつを指さし、拍手に送られたが、表情には疲労がたつた。が、会館の大役を果たした、という満足感も。
ラッセル・アインシュタイン宣言以来の反入ロートフラット・ロンドン大教授はあいつのなかで、「病をおしてこの場に臨んでくださったあなたへの敬意をこめて敬します。あなたの精神をこめての会議に生かします」と述べた。そでで見守るスミ夫人が、目頭を押さえた。湯川さんか入院スミ夫人に付き添われ車いすに乗って会場入りする湯川秀樹博士(88日午前15分、京都市左京区の国立京都国際会館で)

したのは五月末。以来三月近の闘病を、完全看護で支えられたスミさんだった。一時は、週で七、八回も体重が減った。会議を心待ちにしながら、最悪の場合には会議への出席は全く不可能とさえいわれた湯川さん。スミさんの献身在りつらな瞬間である。
「質素な会場・国旗なし」
シンポジウムの会場は、質素なものの。使用する部屋も会議用一室を指定された。会議は本来プレスルームに使う中規模のもの。特別な飾りつけはなく、マイクや反射鏡など必要な器具だけが配置された。机上の名札も画用紙を二つ折りに、サインペンで書き添った。質素なものだった。参加者は個人の資格だから、もついでに国旗もない。
国際的な会議も学会ともなれば、スケジュールも細かく決まっ

ているが、バグウォッシュ会議の場合はメンバーが固定されていて、会議の進行中も非公開と、いわば仲間うちの会議。二年も前から準備にあたってきた国際会館の担当職員も二十八日朝は、始まってみないとわからないという不安に緊張の面持ち。
「演出より討論の中心」
こんどのシンポジウムの準備は二年前から行われてきた。会議の大わくが決まった段階からかきりになる「プロデューサー」呼ばれる職員は、昨年四月に大学を卒業した神谷伸江さん。独り立ちして初めての仕事。「できるだけ地味に、といわれています。先生たちは何度も国際会議に出られている人ばかり。いわゆるままに動くだけです」と、走り回っていた。
「会議の人数、期間、そして細かい配慮ができる」と、榎木信一(さわらぎ・しんいち)会議議長。主催者との間で十五回以上も準備の打ち合わせがされたが、それでも榎木議長は「決まった演出はなく、これから何もかも決まっていって行きます」と、討論の中心がすべてだけに、神経をとがらせていた。

c092-17-030